



おばあさんの  
温もり



前編

赤鈴

## 前編

---

今日もいつもと何1つ変わらない、変われない一日が始まった。

朝起きて、朝飯食って、歯を磨いて、トイレに行って、出勤する。

アルバイト先のスーパーに向かって川口は自転車を走らせる。

季節は冬、風がひんやりと冷たい。

店に到着し着替えが終わり事務所へ行くと店長の姿があった。

「おはようございます」

「川口君おはよう。品出し頼むぞ」

「分かりました」

なんとも愛想の欠片もない会話だ。

そう思いながらも川口は品出しのため店内へと歩を進めた。

足取りは重い。

「いらっしゃいませ」

100%の愛想笑いで川口の目は笑っていない。

朝も早い時間帯だ。お客も少ない。

ふと店内を見渡すと乳母車を押したおばあさんの姿があった。何かを探しているようだ。

「何かお探しですか？」

「おにぎりはどこにあるのかな？」

「こちらになります」

お惣菜コーナーまで足早に歩を進める。

おばあさんはゆっくり乳母車を押しながら歩を進める。

お惣菜コーナーの前まで来て川口はおばあさんを静かに待った。

おばあさんは少し離れたところで手を振っている。

川口は少し戸惑いながらも手を振り返した。

「こちらですね」

「にいちゃんありがとうな」

そう言うとおばあさんはおにぎりを手に取りレジへと向かった。

可愛いばあちゃんだったなあ。と川口は思った。

次の日もそのおばあさんは店に訪れた。

「にいちゃんおはよう」

「おはようございます。今日も寒いですね」

そして川口はおもむろに手をおばあさんの手の上に乗せた。

「ほら、こんなにも手が冷たくなっちゃいました」

おばあさんの手はほんのりと暖かかった。

「にいちゃんの手冷たいなあ。風邪ひいたらあかんで」

「ありがとうございます」

川口はそのおばあさんに3年前に亡くなった祖母の面影を重ね合わせていた。

家に帰ってからも川口はあの時のおばあさんの手の温もりを忘れられずにいた。

そして次の日の昼間、事件は起こった。

川口はいつものように店内で品出しをしていた。

すると怪しい動きをする高校生くらいの3人の少年達がいた。

川口は感づかれぬように少し離れたところで様子を伺う。

しばらくすると、真ん中にいた少年が慣れた手つきで持っていたカバンの中に品物を入れた。

その真ん中の少年を挟むような形で2人の少年が周りの様子を伺っている。

明らかに万引きだった。

何点かの商品をカバンに入れた後に少年達は店を出入口に談笑しながら向かう。

このままでは逃げられる。川口はそう思った。

川口は足早に少年達の後を追った。

そして少年達が店を出たのを確認すると勇気を振り絞って少年達に声をかけた。

「お客様すみません。まだ精算されてない商品がございますよね？」

川口の手は震えていた。

「はぁ？俺達が万引きしたとでもていうんか！だったら証拠を見せろよ！！」

「ではカバンの中身を見させていただいてもよろしいでしょうか？」

「なんでてめえにカバンの中身を見せなきゃなんねえんだよ！意味わかんねえし。行こうぜ」

少年達は足早にその場を立ち去ろうとする。

川口は咄嗟に真ん中にいた少年の腕を掴んだ。

「お、お待ちくださいお客様！」

「なんだよてめえ！離せよ！！」

周りにいた2人の少年達が川口を取り囲み容赦なく殴りかかる。

それでも川口は絶対に手を離すまいと必死で少年の腕を掴み続けた。

「てめえ！！いい加減にしろよ！！」

そんな中どこからか声がした。聞き覚えのある声だ。

「あんたらにいちゃんに何してんの！」

川口が振り返るとそこにはあのおばあさんの姿があった。

川口の表情が驚きへと変わっていく。

「なんだよこのババア。ババアはすっこんでろよ！！」

「け、警察呼ぶよ！」

「呼べるもんなら呼んでみろよ！！」

そう言うと一番左にいた少年はおばあさんを突き飛ばした。

おばあさんは仰向けの状態で後ろへと倒れこんだ。

すると鈍い音がした。

川口は嫌な予感がした。

おばあさんは倒れたまま動かない。

どうやら後頭部を強く打ち付けたようだ。

少年達は焦り始めた。

「お、おい・・・ばあさん動かねえぞ」

そう一番右にいた少年が震える声で言った。

「や、やべえよ！」

一番左にいる少年も冷や汗をかいている。

「に、逃げるぞ！」

そう真ん中の少年が言うと少年達は我先にと逃げ出した。

騒ぎを駆けつけた人達の声が聞こえる。

川口はただぼう然と立ち尽くすしかなかった。

後編に続く。